主日の福音 2023/4/2(No.1228)

受難の主日（マタイ 27:11-54）

今年、自分をイエスのもとに連れて行こう

受難の主日は、聖なる一週間、その中のさらに聖なる三日間を先取りし、平日の参加が難しい人のために十字架による救いのわざを思い起こす大切な日曜日です。あとで聖なる三日間に参加する人には、受難の主日に参加することで直前の心の準備にあてることにもなります。

田平教会の今年の年間テーマは「ここに、イエス様のところに連れていきましょう」です。今日の場面に私たちが連れて来られたら、私たちは最後まで留まることができるでしょうか。怖くてイエス様のもとに留まれないかも知れません。キレネ人のシモンのように、通りかかっただけで十字架を担がされるかも知れない。そうなるとますます、「イエス様のそば近くに」というのはおとぎ話かも知れません。

弟子たちはどこに行ったのでしょうか？受難の主日に選ばれる福音朗読では弟子たちは姿を現しません。聖金曜日のヨハネによるイエス・キリストの受難では、十字架のもとに母マリアと愛する弟子とが立っていました。弟子たちはいったいどこに行ったのでしょうか。

弟子たちが見当たらないのは、福音記者が弟子たちをあえて登場させていないのでしょう。弟子たちでさえも、怖くてイエスのそばに留まることができなかった。それを伝えたくて姿が見えない。そうだとしたらイエス様の悲しさはどれほどでしょう。悲しんでくれる人さえ見当たらない中で、イエスはご自分の命をささげるのです。

しかし、わずかの希望はあります。本日の朗読からは見えませんが、百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」と言ったその直後にこう記されています。「またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。」（27・55-56）

「遠くから見守っていた。」これは火の粉を浴びないためです。自分が可愛いからです。私たちも同じです。怖くて遠巻きにしか眺めることができないでいます。「ここに、イエス様のところに連れていきましょう」どころか、「私は遠慮します」と、覚悟も何も見られないのです。

それでも、私たちはこの一週間を過ごします。聖なる三日間に参加する人もいます。今日は怖くて近づけない自分であっても、聖金曜日の受難の典礼には、イエスの母と愛する弟子のように、イエスの十字架のそばに立つ人になりましょう。

今週一週間は、遠くにいる人からそばに立つ人になるための一週間です。怖くて近づけない私をゆるしてくださり、愛してくださるイエスが一日ごとに私たちを引き寄せ、聖なる三日間に招いてくださいます。あなたがもし、生涯一度も聖なる三日間の典礼にあずかったことがないとしたら、今年が初めて参加する年です。今年、自分をイエスのもとに連れて行く歩みが始まるのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

主日の福音 2023/4/6(No.1229)

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

あなたにも、わたしは模範を示した

聖木曜日と聖金曜日は、形は違いますが、イエスが弟子たちにすべてを与え尽くす一日です。聖木曜日は過越の食事の儀式を通して、聖金曜日は命をかけてです。今日、イエスは食事の中でご自身を与えるために、できるすべてのことをしてくださいました。

まずイエスは、この最後の晩餐の席をご自身用意してくださいました。そして食事が始まると、仕えられる者という態度を捨てて、進んで仕える者となられたのです。弟子たちにすべてを与え尽くすため、「先生」という立場さえもご自分のもとに残さなかったのです。

すべてを与え尽くされたイエスが最後に言われたみことばはこうです。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」（13・15）

先生がするようなことではなく、使用人がするようなことを模範として示された。それは、委ねられた務めの中で、出し惜しみをしてはならない。報いすらも期待してはならない。そうしてすべてを与える者となりなさい。これが最後に与えられた命令だったのです。

イエスが最後に残された模範を見るために、私たちは今晩ここに集まりました。このあと、洗足式があります。何人かの人が弟子の役割をお願いされています。足を洗ってもらうこ方々は、自分は教会の中で、どうやって惜しみなく自分を与えることができるだろうか、考えるチャンスを与えられました。

実は足を洗ってもらう様子を見るほかのすべての参列者も、足を洗ってもらっている人を通してあなたも足を洗ってもらっているのです。足を洗ってもらっている人を見て自分も考え、どうやって惜しみなく自分を与えることができるだろうか、見ている間ずっと考えるのです。

聖木曜日に見たことを、私たちはどこで見倣ったら良いのでしょうか。まずは自宅です。自宅で同居する人との間で、仕えられる者ではなく仕える者となりましょう。「家庭で何かしらの手伝いをする」それでも良いでしょう。あるいは一緒に暮らす人に「これまでかけてこなかった言葉をかけてあげる」でも良いでしょう。私たちは仕える者となるための何かができるはずです。

次、もう一度私たちが聖堂に集まるのは聖金曜日です。「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」年間テーマを実行すべきです。交通手段がなくて聖金曜日に来ることのできない人もいるかも知れない。「私がその人の車椅子となり、杖となってあげる」こうして自分を砕いてお手伝いしてあげてください。そうすれば必ず、弟子たちの足を洗ってくれたイエスに倣うことができるでしょう。

ペトロは自分の足を洗おうとするイエスにこう言いました。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」（13・9）イエスの模範に倣うためには、頭も、一から洗い直さなければならないのでしょう。イエスが私たちの不足を洗い流し、主の晩さんにふさわしいものとしてくださるよう、心を合わせて祈りましょう。洗足式にあずかり、また見ることによって、イエスの模範を確かに受け取りましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

主日の福音 2023/4/7(No.1230)

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

イエスは神の国の生き方で私たちを救われた

「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」（18・9）。中田神父はイエスの語られたことばに下を向くしかありません。一つは、イエスのことばを、私は今日まで見つけることができなかったからです。もう一つは、田平教会の七年間で、きっと何人もの人を失った、父なる神様が与えてくださった人を何人も失ったからです。

今年も私は受難の典礼を始めるにあたり、床にひれ伏しました。ただ今年は、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」そういう思いからひれ伏してはいませんでした。ただひたすら、「あなたが与えてくださった人を何人も失いました」その後悔と、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

そして、主イエスが成し遂げたことに比べて、私が果たせたことはあまりにもつたないと感じたのです。主は「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言っているのに、私は「何人かは失ったかも知れない。けれどもその代わりにこれこれのことを成し遂げた」と強がっているのです。

主イエスは「一人も失いませんでした」と父なる神に感謝しますが、ご自身の命を失ってしまいました。主イエスにとって、ご自身の命をなげうってでも、御父が与えてくださった人々を一人も失わないことは大切でした。それなのに中田神父は、「何人かは失ったが、それを上回ることをした」と言い張っているのです。

どんなにイエスの思いから遠かったことでしょう。イエスの思いを知らずに、こんなにも長い間主イエスに成り代わって祭壇上でいけにえをささげていたのです。どんなに恥知らずだったことでしょう。そんな愚かな司祭のためにも、主イエスは十字架にかかってくださったのです。

ここにお集まりの皆さんが、中田神父と同じような体験をしていたら、ここに集まっていることはすばらしいことです。今の今まで私たちは、自分だけは生き残ろうとしてきました。生きようとする人にとってそれは自然なことですが、この世の生き残り方では誰かが犠牲になってしまいます。私たちはどこかでそれに目をつむってきたのです。目をつむってきた私を、ここに、イエスさまのもとに連れていきましょう。

この世の生き残り方では、私もイエスを十字架に付けてしまいます。イエスは「羊のためにいのちを捨てる」方です。神の国の生き方で私たちを救ってくださったのです。私たちは神の国の生き方を忠実に生きられない弱さを認めます。

今はただ感謝しましょう。一人も失わないために、主は自らを犠牲にしてくださったのですから。私たちは一人も失わないよう全力を尽くしてくださった主によって生かされているのです。「生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」（ローマ 14・8）胸を打ちながら「主は私たちの救い」と唱えて、今日の典礼に最後まで参加することにしましょう。

復活徹夜祭(マタイ 28:1-10)

主日の福音 2023/4/8(No.1231)

復活徹夜祭（マタイ 28:1-10）

家族

主の御復活おめでとうございます。今年は中村大司教様の「ご復活の喜びの手紙」を復活徹夜祭の説教としたいと思います。手を加えるのは最小限にとどめて、大司教様の皆様への手紙を読み上げます。

２０２３年 ご復活の喜びの手紙
「おはよう」

大司教 ペトロ 中村 倫明

子どもたち、青年の皆さん、大人の皆さま、イエスさまのご復活おめでとうございます。
（質問）復活のイエスさまが 一番初めに話された言葉は何？
のっけから申し訳ございません。イエスさまがご復活なされて、一番初めに話された言葉はどんな言葉でしたか？マタイの福音書に記してあります。どうぞ聖書を開いて確かめてみてください。
復活されたイエスさまが、ご自分のことを最初に示されたのは、女性の方々にでした。それは、女性たちが、安息日が終わるとすぐにイエスさまのご遺体のところに向かったからかもしれません。いくつかの聖書によれば、「香料と香油を塗るために」（マルコ、ルカ）とあります。
ところが、イエスさまは墓の中にはおいでになりませんでした。復活なさったことを天使から知らされた女性たちは、そのことを弟子たちに伝えに向かう時に、イエスさまは女性たちに現われて、「おはよう」と声をかけてくださいました（マタイ 28・9 参照）。イエスさまが復活されて、最初に話された言葉は「おはよう」です。
確かに、別の福音書（ヨハネ福音書）では、イエスさまのご遺体が墓にないことを悲しんでいるマグダラのマリアに「なぜ泣いているのか」（ヨハネ 20・13）という言葉をかけておられて、この言葉がご復活後のイエスさまの一番初めの言葉として登場しています。
この言葉にも、わたしたちに対するイエスさまの深いいつくしみを感じますが、より「おはよう」という言葉にはそれを感じますし、やはり一番初めの言葉は「おはよう」ではなかったかと思います。このことは、その後、弟子たちにイエスさまがご出現なされた時におっしゃった言葉からも、想像できそうです。

イエスさまが弟子たちにおっしゃった言葉
弟子たちは、イエスさまを十字架に付けたユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ隠れていました。そこにイエスさまが現れておっしゃいます。「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ 20・19,26、ルカ 24・36）。
この時にイエスさまが用いられたヘブライ語は「シャローム」ではなかったかと思われます。シャロームは、文字通りには「平和」を意味する言葉ですが、人々は「おはよう」とか「こんにちは」などのあいさつとして使っている言葉です。ですから、やはり、「おはよう」という言葉を、復活後のイエスさまは、一番初めに語っておられたのではない

でしょうか。

わたしたちが普段に使う言葉

わたし中村倫明大司教は今年の新年号でお願いしました。「声をかけていこう」と。

声をかけておられますか。教会の行き帰りに、出会う人たちに声をかけていますか。その中でも、「おはよう」という言葉は、出会う時の普段の一番初めのあいさつの言葉です。この普段のあいさつを大切に丁寧にしているでしょうか。出会う人を無視したり、無愛想で笑顔でなかったりしていませんか。ちゃんとわたしたちは基本的なあいさつや対応ができているでしょうか。

聖書の「おはよう」

面白いことにこの普段の基本的な「おはよう」という言葉は、聖書の中では、ご復活の場面にしか登場しません。もちろん、普段の言葉ですので、ことさら記述することもなかったでしょう。ならば、ご復活の時の特別な記述の「おはよう」には特別の含みがあるはずです。

英語では「good morning」（良い朝）。「良い朝ですね。良い日になりますように」という思いがあるのでしょう。雨が降っても「グッドモーニング」です。そして、ご復活の時の「おはよう」は、まさに「おはよう」の中の「おはよう」です。

だってイエスさまは３日前に亡くなって、墓に葬られていました。「おはよう」と言える朝が来るなんてありえない「おはよう」なんです。あるいは、もしそこに言葉が存在するなら、「おはよう」よりも「うらめしや」「おれを見捨てたな」「呪い殺してやる」の言葉が人間の世界かもしれません。でも復活の世界は、何もなかったかのように、いつものように「おはよう」で始まっていきます。

以前、聖フランシスコ病院の玄関に立つ機会がありました。ある日、知っている方がやってきて、笑顔で「おはようございます」と声をかけてもらいました。「何事ですか？」と尋ねると、「おふくろが危篤で呼び出されました」。わたしは言葉が出ませんでした。次の日、「おはようございます」と同じ方でした。「どうでしたか」勇気を出して尋ねました。「まだ頑張っています」うれしかったです。３日目、同じ方が「おはようございます。お世話になりました。今から葬儀の準備です。お祈りください」。悲しいのにつらいはずなのに、感謝を知っている人の「おはよう」でした。

ならば、復活の主に出会ったなら、どんな時だって「おはよう」です。苦しくつらい時も悲しい時も、過ちや罪を犯しても、どんな時だって、復活された主はともにおられます。

あらためてお願いいたします。「主はともにおられます」「主の平和がありますように」の思いを込めての、わたしたちの「おはよう」の声かけを復活させていきましょう。

子どもたちへ
「オッハー！」（だいぶふるいかなぁ）

復活の主日（日中）(ヨハネ 20:1-9)

主日の福音 2023/4/9(No.1232)

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

後任の神父様も、田平教会に「来なさい」と呼ばれた

あらためて主の復活おめでとうございます。復活徹夜祭は、中村倫明大司教様の復活の喜びの手紙をお借りして届けました。この復活の主日日中のミサの説教は、私の言葉で伝えたいと思います。

復活徹夜祭の説教を通して、私たちは復活したイエスさまの「おはよう」を聞ききました。イエスさまの「おはよう」「平和があるように」を聞いた人たちは、自分のしなければならないことにすぐに気づき、動き出します。マグダラのマリアは弟子たちのところに走って行きました。

ヨハネ福音書ではありませんが、エマオに向かう弟子たちもイエスから使命を託され、すぐに使徒たちのもとへ走って行きました。ここでは「おはよう」「平和があるように」以外のほかの言葉でしたが、復活したイエスから声をかけられた人は、使命を感じて出かけていくのです。

では私たちはどこで、イエスの声を聞くのでしょうか？「おはよう」「平和があるように」またはその他の声かけを、どこで聞くのでしょうか。いろんな考えがあるかも知れませんが、私たちを田平教会聖堂に集めてくださる声が聞こえた場所が、「復活したイエスが声をかけてくださった場所」ではないか。そう考えています。

中田神父は七年間、評議会の役員に一つの声をかけ続けました。「困った困った。」「お酒があるぞ」とか「おいしいケーキがあるぞ」ではありません。いつも「困った困った」と声をかけていました。するといつもすぐに役員の誰かが「どうしましたか？」と飛んできてくれました。

中田神父の「困った困った」は、評議会の役員からすれば、「あー。すぐに来い」ということだなと理解して、本当にすぐに来て用件を聞き、対処してもらいました。福江にこのまま連れて行きたいくらいです。

イエスも、皆さんを田平教会聖堂に集めるために、巧みに声をかけてくださっています。私たちはただ単に「来なさい」と言われてもすぐには動かないことが多いのです。そこで、一人一人、気が付いたら田平教会聖堂に集められている。そんな仕掛けを、復活したイエスさまは用意するのです。あなたがどうしても、この聖堂に集まって復活を祝う気になるように、工夫して声をかけておられるのです。

「中田神父は、あと２回しか田平で日曜日のミサをしないよ。行く？行かない？」そんな形で「来なさい」と呼びかけるかも知れません。「今年は何回、ミサに行ったかな？」そういう呼びかけかも知れません。「家族のために、みんなで祈ってもらったら？」この声かも知れません。

つまり、復活したイエスの声は、日常生活の中で聞こえるということです。その声はあなたを田平教会聖堂に導きます。あなた自身をこの聖堂に導くだけではありません。あなたの家族も、あなたの友人も、導きを必要としているすべての人も、「来なさい」と呼ばれています。

田平教会聖堂には、復活したイエスから、もう一人「来なさい」と声をかけられました。それは後任の主任神父様です。後任の神父様は初めて平戸地区で司牧活動を始めます。どうか、惜しみない協力をお願い致します。復活したイエスの声に、田平教会家族はきっと応じてくれる。そう信じています。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)